令和5年10月6日(金)13:30開会
本庁7階 委員会室

<出席者>

委員: 昆野宏彦委員、千田敏彦委員、金野耕治委員、菊地恵委員、佐藤清光委員、伊藤公好委員、
錦山加奈子委員、千葉一之委員、松平アイ子委員、佐々木幸初委員、菅原千保子委員、
八幡初恵委員、千田寛委員

市側: 健康こども部長 高野 聡、健康こども部健康増進課保健師長 千葉 芳枝、
健康こども部新医療センター建設準備室参事兼室長 桂田 正勝、同副主幹 菊池 泰幸、同主査 佐藤 香純、
政策企画部未来羅針盤課副主幹 菊地 徳行、
医療局経営管理部長 佐々木 靖郎、医療局経営管理部経営管理課長 浦川 敏明

(委嘱状の交付 昆野奥州市社会福祉協議会事務局長代表受領)

1 開会

<桂田室長>

それではただいまより、第1回奥州市新医療センター検討懇話会を開会させていただきます。
次第の2、健康こども部長 高野聡よりご挨拶を申し上げます。

2 あいさつ

<高野健康こども部長>

健康こども部の高野でございます。

本日は、お忙しいところお集まりいただき、大変ありがとうございます。

本日は、第1回目の奥州市 新医療センター検討懇話会ということで、先ほど委嘱状を交付させていただきました。

この新医療センターにつきましては、皆様ご承知のこととは思いますが、病院機能のほか、母子・子育て支援やヘルスケア機能も備えた、複合型の施設とすることを目指しております。市では、この整備に向け、今後、基本構想・基本計画の策定作業を進めてまいります。

その際、その構想や計画に盛り込む内容について、主に市民目線、利用者目線でのご意見を頂戴したいと思い、このような検討懇話会を設置いたしました。

委員の皆様におかれましては、この新たな施設が、市民にとってより良いものとなりますよう、格別のご協力をお願いいたします。

本日の会議では、最初に、検討懇話会の進め方やこれまでの経緯を説明させていただき、その後、周産期医療をテーマとした意見交換のほか、テーマを絞らずに自由にご発言いただける場面も設けております。

本日はいただいた意見につきましては、基本構想・基本計画に反映させてまいりたいと考えておりますので、忌憚のないご意見を頂戴いたしますようお願い申し上げます。挨拶に代えさせていただきます。

本日は、どうぞよろしく願いいたします。

3 座長選出

<桂田室長>

続きまして次第の3座長選出に入ります。

検討懇話会の設置要綱に規定はございませんが、会議の進行役として、委員の中から座長を選出したいと存じます。

座長はいかに選出いたしましょうか。

特段のご発言がなければ事務局から座長を示させていただきたいと思っております。

よろしいですか。

(異議なしの声)

ご異議ないようでございますので指名させていただきます。

座長には奥州市社会福祉協議会の昆野宏彦委員をお願いしたいと思います。
皆様の拍手でご承認をお願いいたします。
それでは昆野委員、座長席にご移動願います。
ここで昆野座長より一言ご挨拶をお願いいたします。

<昆野座長>

ご指名をいただきました奥州市社会福祉協議会の昆野宏彦でございます。
この懇話会に際して、座長ということで非常に重いなと思いつつも、ご指名でございますので、お引き受けをすることにいたします。
いずれ奥州市の少子化対策、それから医療ビジョンを市民目線で話す良い機会を作っていただいたんだというふうに思っております。
皆様方積極的なご発言をお願い申し上げて、進行にご協力をお願いしたいと思います。
以上でございます。

<桂田室長>

ありがとうございました。
それでは次第4の説明及び、次第5の意見交換については、昆野座長の進行でお願いいたします。

<昆野座長>

それでは早速でございますが、次第の4の説明の方に入って参りたいと思います。
最初に、(1)令和5年度の検討懇話会の進め方について、事務局の方からご説明をお願いいたします。

<桂田室長>

それではご説明いたします。資料は次第の表面を見ていただければと思います。今年度はとりあえずこの第1回から第3回までというのを予定しております。
第1回が今日でございますけども、この後の予定ということで、奥州市モデルと新医療センター整備についてこれまでの経過等の説明をさせていただきたいと思っております。
そのあとにちょっとテーマを決めてですね、意見交換ということで今回は周産期医療と新医療センターの役割についてということで、ここについてご意見をいただければというふうに思っております。
その後、その他新医療センターについてということで、フリートーク形式ということでテーマは絞りませんので、自由に意見なり質問なり出していただければというふうな構成で考えております。
2回目が10月の下旬となっておりますが、最後に話そうかと思っておりましたが、30日を予定しております。
で、この際はですね意見交換を2つテーマを設けております。
1つが新医療センターの医療機能と病床規模についてということで、医療ニーズを踏まえた適正な規模というものをちょっと考えていかなきゃ駄目だということでそういったところをテーマにしたいと思っております。
あともう1つはですね、設置場所、建設場所ということで、それをテーマにしたいということで考えております。
この時もですねまた後半の部ではフリートークの部を設けたいというふうに思っております。
11月くらいですね、整備構想の方の素案がまとまる時期になっておりましたので、それを踏まえて12月中旬には、基本計画の策定に向けて、ここもちょっとポイントを何点かお示ししてですね、ご意見いただければなということで計画しております。
この時も合わせてフリートークの部を設けるという形です。
こういった感じで3回設けますが、中身の進行具合でちょっと意見が言い足りないとかですね、そういうことがあれば、もしかしたら追加ということも考えておりますのでよろしくをお願いいたします。
説明は以上でございます。

<昆野座長>

事務局からのご説明をちょうだいしたところです。
基本的には3回のこの懇話会で進めしていきたいというお話のようでございます。
何か皆様方の方でご質問ある方、挙手をしていただきながらご発言をお願いしたいと思います。

よろしいでしょうか。

それでは内容の方、次に移らせていただきたいと思います。

(2)の地域医療奥州市モデルと新医療センター整備について、事務局から説明をお願いいたします。

<佐藤主査>

それでは新医療センター建設準備室の佐藤と申します。

どうぞよろしくお願いいたします。

では私の方からは地域医療奥州市モデルと新医療センター整備についてということで、ご説明させていただきます。

では委員の皆様には、事前に資料をお配りしておりましたので、要点をかいつまんでのご説明とさせていただきますので、ご了承いただきたいと思います。

それでは資料はホチキス留めの資料1と書かれたものの、1ページ目をお開きください。

一番、胆江医療圏における現状と課題についてです。

人口は年々減少していきませんが、高齢者はまだまだ増える見込みで、将来のニーズとしては、介護需要がまだ伸びますが、医療需要は減少する見込みとなっています。

医師不足や、地域包括ケア、水沢病院の老朽化、それから持続可能な病院経営の確立など、これら課題を克服して安心して暮らせるまちにしていくために、将来の医療体制のグランドデザインが必要となっております。

2ページ目をご覧ください。

地域医療奥州市モデルと新医療センター整備の基本的考え方についてです。

市では、将来の医療体制のグランドデザインとして、今年6月に地域医療奥州市モデルを決定しました。

この奥州市モデルの趣旨は、市内医療施設で機能分化、連携強化を図り、ネットワーク型の地域医療体制の構築を目指すというものでございます。

新医療センターは、この奥州市モデルの実現をより確実なものにするために、市が整備を目指しているもので、基本的な考え方としては、単なる水沢病院の建て替えではなく、利便性や付加価値の高い複合型の医療施設を目指すというものです。

検討の方向性についてですけれども。

機能案については後程ご説明いたします。

建設場所については、水沢公園の陸上競技場を基本に検討して参ります。

では資料の方ページをめくっていただきまして、一つ飛びまして4ページ目をご覧ください。

新医療センターの機能案です。

医療機能の特徴としては、急性期から回復期をメインとした医療にシフトし、介護予防から在宅医療までの医療を提供できる体制の構築を目指して、病床数は80床程度、ほかに母子・子育て支援やヘルスケア機能を付加するといった内容でございます。

それでは資料の方、3ページ目の方に戻っていただきたいと思います。

こちらは、地域医療奥州市モデルのイメージ図でございます。

地域医療の将来像を描いたものでございます。

先ほどお話ししました通り、人口がどんどん減っていくということは、将来患者も減っていくことが見込まれます。5つの市立医療施設を維持しながら、どうやって効率的な地域医療を提供していくかということで、このネットワーク型の地域医療モデルを作りました。

特に今後必要になる地域包括ケアシステムの充実という面では、介護施設との連携が必要になってきますし、医師の働き方改革や、持続可能な病院経営も考えていかなければなりません。

へき地医療では、ICTを使ったモバイルクリニック、移動診療車が導入予定となっております。

そしてその中で、新医療センターとしては、急性期医療から回復期医療へシフトし、母子・子育て支援機能やヘルスケア機能、そういったものの複合的な施設を作りたいということでございます。

そしてこの中心となるのが、図の真ん中のところの医療情報の共有ネットワーク化でございます。

それぞれの医療機関の強みを活かして、機能の役割分担をした上で、連携を強化して、今の枠組みの中で、ネットワークの技術を活用して、何とか効率的な医療を維持し、市民の皆さんに喜ばれる医療を提供していきますよ、というのが地域医療奥州市モデルでございます。

それでは次に、資料の5ページ目をお開きください。

新医療センター整備に係るスケジュール案でございます。

令和6年11月の総務省協議に向けて、基本構想と基本計画を策定し、策定にあたっては、公立病院経営強化プランとの整合を図りながら進めて参ります。

最短で令和10年度の開所を見込んでおります。

次に資料は6ページです。

新医療センター基本構想・基本計画等の検討体制です。

内部検討組織として、図の左側の部分になりますけれども、市長を委員長に検討委員会を設置しまして、庁内横断的に意見の集約を図るため、専門部会や各種ワーキンググループを設置いたします。

また、医師会等の有識者や、利用者の支援団体や公募市民等で構成する本日の検討懇話会など、外部からの意見をいただくこととしております。

以上で説明を終わります。

<昆野座長>

事務局からの説明が終わりました。

質問を受け付けたいと思いますが、この後の意見交換の部分でも、フリートークの内容がございますので、そちらの方で確認することについては多く取りたいと思います。

どうしてもこの場面で聞いておきたい事項がございましたら、質問をお受けしたいと思いますがいかがでございますでしょうか。

<金野委員>

公募の金野の方でございます。

最初に確認をさせていただきたいのは、この懇話会の性格といいますか、どこまで権限を持たせていただけるのか、ということであります。

この図を見ますと、いろんな部会があったり、或いは検討委員会があったりいろんな組織がある中で、意見としては、例えば、提出はするんだけれども、決定するのは、どこなのか、最終的には市議会というふうなことを予算とか含めてですね、そういう話になるんでしょうけれども、私たちのこの場で議論したことが、どのように反映されていくのかどうなのかというふうな辺りをお聞きしたいと思います。

<昆野座長>

それでは事務局の方で説明をお願いいたします。

<桂田室長>

ではお答えいたします。

来年に向けての当面の目標は、施設の整備に向けて基本構想・基本計画を最終的に策定することとなります。

今、その基本構想の素案を今内部でもちょうど検討しているところでございました。

その基本構想の素案ができ上がってから市民の皆さんに意見聴くという方法もあるんですが、できればその素案を組み立てる段階で、あらかじめ市民の皆さんから意見いただけるところはいただいて、それを素案に反映させたいというふうに思っております。

そのためにこちらの方でテーマを設けて、ご意見をいただいて、それを素案にまとめます。素案が11月頃にできますので、でき上がった素案については、これは地域医療懇話会の医師会の先生方にも見てもらいますし、あとは一般の市民の方にも、パブリックコメントという形でご意見をちょうだいしたいと思います。

そういった形で基本構想の案を最終的には素案をまとめて、さらにそれにご意見いただいて直すところを直したら、この懇話会が決定する場ではございませんので、最終的に市の内部の方で、もっと言えば市長が決定させていただいて、あとはそれを市議会にお諮りして、最終的には、そこで合意をいただくというようなプロセスというふうに考えております。

<昆野座長>

素案に直接意見が反映されるという立ち位置のようでございますが、いかがでございますか。

その他ございますか。

なければ意見交換の方に進んで参りたいと思いますがよろしゅうございますでしょうか。

それでは、意見交換の方に入って参りたいと思います。

今回のテーマが周産期医療と新医療センターの役割についてというテーマでございました。

それではこちらの方についてまずは説明を受けたいと思います。

説明をお願いします。

<佐藤主査>

それでは私の方から、周産期医療と新医療センターの役割についてということで、資料の2です。

これについて、ご説明いたします。

それでは1番の周産期医療の現状についてでございます。

出生数は減少傾向で、奥州市の令和4年度の出生数は551人。

平成30年度と比較すると145人減っております。

その一方で高齢出産が増えたことなどにより、ハイリスク分娩が増加しております。

ハイリスク分娩に対応できる体制として、産科のほかにも、小児科、麻酔科など、複数の診療科が連携することで実現する高度な診療体制が必要ですが、医師数の減少や医師の働き方改革によって、現状を維持するだけで精一杯というところが、現状でございます。

このため、今ある県内の他の分娩施設を維持しながら、さらに奥州市の新医療センターにも分娩機能を設けるということは、極めて難しい状況です。

安全な分娩のためには、遠方の病院に頼らざるをえなくなってきており、これによって生じるアクセス不安などについて、行政が手厚く支援する方向でございます。

では奥州市ではどのような支援を行っているかというのが、2番の市の主な妊産婦支援サービスについてで、7つございます。

①と②につきましては、妊娠届出時から、助産師、保健師が身近な相談相手として寄り添い、必要な支援につなぐ伴走型の支援と、経済的支援を一体型に実施しているものでございます。

③の妊産婦宿泊費助成については、出産時の体験のための宿泊助成で1泊5000円で、3泊までということの内容でございます。

④のハイリスク妊産婦アクセス支援助成は、ハイリスク妊産婦に対する周産期母子医療センターまでの通院や出産時の交通費等の負担軽減を図るもので、1回の出産当たり5万円までということでございます。

⑤の妊産婦タクシー助成券については、通院や買い物などの外出に利用できるお出かけ支援で1万円。出産や健診などで医療機関にかかる際に利用できる、出産等支援ということで、4万円を4枚という内容でございます。

6番の産後ケア事業については、35か月未満の方を対象に、心身ともに不安になりやすい産後に、心と体を回復させ、安心して子育てができるようにサポートするもので、宿泊型と日帰り型については、水沢病院内で行っておりますし、訪問型については、助産師が直接お宅に訪問してケアを行っております。

宿泊型につきましては県内で唯一の支援となっております。

7番については、子育てに関する情報をぽちっと奥州やLINEにより発信をしております。

次に3番の意見交換のテーマについてです。

先ほどお話しました通り、現状を踏まえまして、周産期分野における新医療センターの果たすべき役割は、いかにあるべきかということで考えられることの例を挙げてみました。

1つ目としましては、不安を少しでも解消するための母子支援サービスの拠点としての役割。

例えば産前産後ケアの実施や助産師等の活動の拠点として、それから相談窓口や相談支援サービスの手続きの窓口としてなどでございます。

2つ目としましては、周産期母子医療センターとの連携の拠点としての役割。

例えば遠くの病院まで健診を受けに行くということが負担ということに対する策として、市内全域どこでも、妊婦健診が受けられるような体制を作り、実施する。

あとは、妊婦や胎児情報を共有して、ネットワーク化することなどが考えられます。

ここで挙げたものは、あくまでも例ということになりますけれども、他に考えられること、或いは新医療センターに期待したいことなどについて、ご意見いただければと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

<昆野座長>

ご説明ありがとうございました。

ここでの進め方になります、今ご説明いただいた内容についてまずは質問を受けるっていう形にしたいと思います。

そのあと委員お一方ずつですね、時間的にはちょっと短くて申し訳ないのですが2、3分程度ずつご意見をちょうだいしながら、全員のご発言をお願いしたいというふうに思っておりますが、よろしくごさいますでしょうか。

それではまずただいま説明いただいた内容についてご質問のある方は挙手をしていただきながら、ご発言をお願いしたいと思います。

<八幡委員>

岩手奥州ダブルケアの会八幡です。

3点ほど質問と、意見、提案みたいな話をさせていただきたいと思います。

今の説明に少し補足があるといいなと思ったんですけども、昨年、確か妊産婦に対するアンケートという聞き取り調査をされていたかと思います。

出張懇談会、これプロジェクトの皆さんでしたけど出張懇談会だったり、パパママ懇談会もされていたかと思います。

そこで、実際その妊産婦の皆さんからどんな話があったのかっていうのを先に教えて欲しいなと思います。

というのは、IBCで放送された産めない街のつぎとおかの中で、プロジェクトの方が、そのアンケート結果踏まえて、結構意外な結果になったみたいなこと、うろ覚えで申し訳ありませんが話をしたような気がして、その点について、最初に教えてもらえたらと思います。

次、2つ目なんですけど、現在妊産婦支援サービスがたくさん充実しているなというふうに思います。

私の子供を産んでた頃、同世代の皆さんはもう市内で分娩予約ができなくて、北上なり一関なりで産んでた方、何週まではこちらで地元で妊婦健診を受け、何週以降は北上という友人たちが多かったんですけども。

その頃に夢物語のように、タクシー使えるといいねとか、泊まれたらいいのにとか、家1回帰るの心配だな、なんて話してたことが、今こうやって、現実には支援として出てきてるというのは、本当にその時はもう井戸端会議の口でしかなかったことですけども、充実してきてるんだなというふうには感じますので、今現在、比較的経済的支援が多いかなというふうに思っているんで、これはもちろんそのまま続けつつ、次は、精神的サポートをさらについていうふうに考えるところです。

現在ももちろん保健センターさんの方では、随時相談はいつでもいいというふうになっています。

私自身も、それこそ、今いらっしゃる保健師長さんに、泣きながら相談をした恥ずかしい経験があるんですけども、そのように気軽に保健センターに行って話を聞いてもらう、その時は妊娠のときですごい不安だったんですけども、メンタルが上下する妊産婦さんです。

ただ残念なことに、そういうふうに気軽にというか、いつでも随時保健センターでは相談を受けてますよ、ということを知らないわけじゃないと思うんですけど、なかなかそこに向かない方が多いのかなというふうに思います。それでネットで検索したり、或いは確かではない情報を得てしまったりとかっていうこともあるので、その敷居というか、一つ挙げられるのは、やっぱりホットラインみたいなものは今結構盛んになってきているのかな、というふうに思います。

ホットラインってのは相談電話とかそういうことですね。それがもっと周知され、妊婦健診、最初の頃は1か月おきですので、その間にいろんなマイナートラブルがありますから。

病院行くほどじゃないけどっていうことでも聞いてもらえるようなのが、今でもあると思うんですけども、さらにこういうのがあっていうのの周知がもっともっとできるといいのかなというふうに考えているところです。

で、3点目なんですけど、産後ケアに関して、これ2018年の10月からの実施だったと思うので非常に宿泊も早く始められていてとても進んでいて良いなというふうに思ってたんですけども、それを産前までこれからさらに拡充していくっていうことは聞いてたんですけども、その産後ケアについて、おそらく妊産婦さんと、それから旦那さんとかそういう方については、母子手帳とか、あと出生届出した時とかに必ずこうありますよって周知はもちろんされてると思うんですけども、産後ケアをここ何年か見て感じたのは、本人たちはもちろんだけども、その家族に、何で産後ケアが必要なかっていうことをわかってもらわないと何でわざわざ立派な家があるのに泊まりに行くんだいって言われてしまったら・・・。

当時は5000円かかってましたから一泊。今は5000円かかんないですけど、何でわざわざ5000円払ってまで、泊まんないのって、家にいるんじゃ駄目なのって言われてしまう可能性もあると。

なので、どうして産後ケアが必要なのか、もし今時間があれば少し話していただけると、と思うんです。

なぜかっていうと、コロナで日帰りとし、宿泊が中止になった時に、訪問だけを保健師さんたち続けられていたというふうに聞いています。

で、すいませんこれ、議会の答弁での話だったんですけども、訪問は増えてると。

訪問した中で、やはり日帰りなり宿泊なりが、この人には必要なんじゃないかなって思われるケースがあったというふうに、答弁があったと思うんです。

もちろんこの場で、話せないこともあると思うんですけど、一般的な話でも、もしどういふ場合に、産後ケア、この人はやっぱり必要だなって思うようなケースだったのかっていうのを説明いただくと、より何ていうんでしょう、必要性わかってもらえるのかなというふうに思います。

以上3点だったんですけども、よろしいでしょうか。

お願いします。

<菊地未来羅針盤課副主幹>

プロジェクトの菊地と申します。

奥州市のモデルを作った時の担当でございますので、私の方です。本当に様々な方、妊産婦さんとかです。

ね、子育て、パパママとかにも相当な数のヒアリングというかですねお話をしてきました。すぐ最初はですね分娩施設がないことについて、どういう不安を持ってるのかな、ということ結構聞きに行ったんですね。

ところが、実は妊産婦さんたちというかそういう方たちの不安に思ってることって、そこは大事なことだけど、実はもっともっと大変なことがあって、相談できる、する場所がないとかですね、やっぱり今、なかなか核家族になって、相談する場所もないという、しかも預けるところもないので、自分の歯医者とか病院にも行けないとかですね、そういう話の方がすごく多かったですね。

確かに出産場所が遠くなることは不安だけれども、例えば今通ってる健診を受けている地元の病院さんですね、そこうまく中部であったり、磐井であったりですね、しっかりつないでもらえれば、それはそれで何とかするしかないよねというような声もあってですね、我々が思ってた以上に分娩の場所というか、奥州市にないということが何かものすごく大きな問題なのかなあと思っていたんですけども、それよりもやっぱりその相談とかですね、いろんな支援の方をちゃんとやってくれという声が多かったなというふうに私はとらえております。そういうことを踏まえて、このモデルの中にですね、子育て支援機能ということが絶対に必要だということで、複合型の一つの大きな柱として組み込んだということでした。

なので産後ケアとか今おっしゃったようなものとかですね、そういうとにかく相談できる、例えば今オンラインです24時間でも相談できる体制ございますけれども、そういうものをやっぱ充実させることによってですね、本当に困ったときにしっかりお医者さんと繋がることができ、本当に危ない時は例えば救急車とか何とかと使ってですねしっかり病院に行けるような体制を整えることができますね、実は意外と大事なことのかなというふうには考えてございます。

その時の話については以上でございました。

<千葉保健師長>

それでは、健康増進課の千葉と申します。

私からは2点目3点目についてお答えさせていただきます。

2点目の精神面のサポートということでした。

なかなか窓口としては開設しているけれども、そこになかなか相談できない人もいるんじゃないかということでした。

資料2の方に、2の市の主な妊産婦支援サービスの中の①というところで、出産子育て寄り添い支援事業というのが、昨年から始まったのですけれども、これは国の制度として始まったものになります。

給付金と合わせて、寄り添う伴走型支援ということで始まったものになります。

今までも母子健康手帳交付の時には必ず面談をしながら、不安に思うこと、心配なこと、疑問なこと、そういったことにはお答えしながら、支援してきたわけなんですけれども、国の制度によりまして、妊娠の8か月のときに、アンケートをとりながら、そのアンケートの中で、希望する方には、相談対応をするということをしてきております。アンケートというかその面談希望というのも、月にすると、数パーセントにはなるかなと思いますが、何人かやっぱりいらっしゃいます。

簡単な疑問であるとかっていうこともあるんですが、やはり出産後のことが心配だというような相談もありまして、それには訪問であるとか電話であるとかっていうことで対応しているところです。

あとその後、出産後の赤ちゃん訪問であるとかっていう場面でも、産婦さん方にはお話を聞いたりという場面はございました。ですが、やはり周知はしているものの、その敷居が高いっていう辺り、こちらとしては感じていないところではあるんですけども、妊産婦さん方にはちょっとこう勇気がいるところなんだなというのも、先ほどのお話でお伺いしましたので、なるべく簡単な相談対応ができるような形で、電話はもちろんなんですけれども今までもやっていますが、次からは、今度情報発信というところにありますLINEでの情報発信も始めますので、そういったことでも受け付けられるような形にしていきたいなと思っております。

それから3つ目の産後ケア事業についてです。

コロナの感染症のために、水沢病院での日帰りケア、宿泊ケアが中止になったのはその通りでございました。その分を訪問ケアで頑張っていた、訪問の助産師さんに頑張っていたというのはその通りでした。訪問ケアを希望する方というのは、お家に行っただけのケアということになりますので、お家に受け入れてくれる方ということになりますでしょうか、そういう方ですし、あと比較的、母乳の育児のケアであるとか、あとは子育てそのものの、子育てのお世話の仕方っていうか、そういった具体的なところを希望される方が多い傾向にあります。

そして、宿泊ケア、日帰りケアをご希望される方は、比較的休養をご希望される方が多いです。

少し、赤ちゃんを離れて休みたいであるとか、夜中何回も起こされるので、ちょっと寝不足なので少し休みたいっていう方が、多くあります。

もちろん日帰りも宿泊ケアも、おっぱいのケアであるとか、子育ての相談対応とかそういうことも含めてやっているわけなんですけれども、比較的多いのが、休養をしたいという方が多くあります。

で、ご家族に向けての周知、必要性についての周知ということも先ほどお伺いしましたので、そういったことについては今後検討して参りたいと思います。

以上です。

<昆野座長>

ご説明いただきました。

<八幡委員>

ありがとうございます。

あと、私のところにやっぱりなかった、知らなかったことも知れたのでよかったです。

私が一市民でそれを言うてしまうのはあれだと思んですけど、やっぱり保健師さん多分もっと必要なんだと思います。

この後、今日は周産期ですけども、さらにその先、子育てまで進んでいくと、どうしてもやっぱり不安で仕方がないってなるのは、夜から夜中にかけて、この子は朝まで生きてるだろうかって思っちゃうこともあったりする。

その時に、今でこそ、岩手県の夜間の子供救急ダイヤルが24時間になりましたけども、アレはやっぱり、役に立つかどうか、電話してちょっと安心感を入れるっていうのはすごくありますし、私も利用したことありますし、他の周りの方も時々利用したっていうことは聞くので、今の支援サービスが私当時夢物語だと思ったって言ったんですけど、さらにもっと言うていいのであれば、そういった夜間、不安事がとにかく増すのは夜間だと思うので、夜間の、それこそ、電話でもいいですし、ゆくゆくは例えばビデオ通話とか、そういったことで、とにかく安心感、孤立感をなくす、安心感を持って子育てなり、出産していったらいいんだろうなっていうのが、私今思ってるところです。

以上です。

<昆野座長>

その他、どうしても質問したいって方は。

金野さんどうぞ。

<金野委員>

公募の金野です。

支援サービス、いろいろ充実されてるっていうことでわかりました。

参考までに、これまでの実績で、数字とかがわかればですね、教えていただきたいなと思いました。

<昆野座長>

事務局の方でよろしいでしょうか。

<千葉保健師長>

出産子育て寄り添い支援事業についてはちょっと始まったばかりで、まだ年間通してという実績はないです。ただ、令和4年度の妊産婦さんからは、給付をしておりましたので、年間の出生が大体500ですし、それにプラス妊婦さんとなると、800人ぐらいには給付しているかなと思います。

それから、2つ目の妊婦応援給付金、産婦応援給付金についても、大体同じぐらいのですね、妊婦数、産婦数ということになりますので出生数と同じぐらいの給付金となります。

それから3つ目の宿泊費助成についてです。

これ令和4年度になりますけど、3件ございました。

3件のうち、付き添いの方もという方は2件ございました。

それから、ハイリスク妊産婦アクセス支援事業については令和4年度途中からの開始でしたが、令和4年度で12件の申請がございました。

タクシー助成券ですね、妊産婦タクシー助成券です。

これ、お出かけ支援タクシーと出産等支援タクシーと2種類ございまして、お出かけ支援タクシー助成の方は、利用率というのでいきますと26.6%の利用率となります。

それから出産等支援タクシー助成券の方は、19.6%という利用率になります。

それから、産後ケア事業についてですが、産後ケア事業は先ほども申し上げました通り、宿泊ケアは中止とさせていただきましたので実績はございません。

日帰りケアの方は、令和4年の12月から再開をしておまして、12月ですので、4か月程度ですけども。

15人の方、延べ数で言いますと47人分のご利用がありました。

それから訪問ケアの方は75の方に延べ数で251回の訪問ということになっております。
宿泊ケアの方は、令和5年の6月から再開をさせておまして、現在は日帰りも宿泊も訪問も三種類やっております。
それで、宿泊の方も、週に1回、1人しかちょっと受け入れができませんけれども、毎週、予約が入っております。
以上です。

<昆野座長>

実績の方、説明をいただきましたがよろしいでしょうか。

<金野委員>

ありがとうございました。

わからなかったのは、利用率という率というのは分子分母が何なのかを教えてください。

<千葉保健師長>

お出かけ支援タクシーのほうは、交付が534人に対して、利用券が1人につき20枚の交付になりますので、その20枚を交付したうち使った枚数が幾らかということで、出したものが利用率ということで出した数字です。
それから、出産等支援タクシー助成券も同じく、交付が妊婦さん全員ということになりますので、それに対して4枚の交付ですので、その枚数について利用した枚数ということでの利用率ということで出したものになります。

<昆野座長>

よろしいでしょうか。

それではそれぞれの委員の方からのご発言ということにさせていただきたいと思いますがよろしいでしょうか。

それではですね名簿順に行きたいと思います。

千田敏彦委員の方から順番にお願いしたいと思います。

<千田委員>

千田でございます。

私、民生委員をやってますし、自分の地区を回ったりすると気になるのは、やっぱり独身の結婚できる年齢なのに独身の男性女性がものすごく多いってことが、やっぱり気にかかる訪問です。

それから高齢者に関しては、高齢者の一人暮らし、それから高齢者のご夫婦の暮らしやそういうところがあって、本当にマメに歩かないと家庭訪問しきれないくらいなんです。

これが非常に気にかかるところで、日常的にそう思ってます。

私も保育園の園長もやりましたから、保育園の子供に入っているお父さんお母さんの子供さんっての、2人か3人なんです。結構多いんですよ。

とさっき言った、結婚してないところが多いために、少子の時代になってるんです。

決して結婚して子供があんまりないじゃなくて、2人から3人いらっしやるということが現実です。

もう一つ。これ15、6年前だったと思うけど、岩手県立大学の調査でね、これ全国に流れたんだけど、半年に、4回通院したお母さんには不安がほとんどないって書いてあるんですよ。

これなぜかって言うとね、子供さん抱いて訪問したときに、看護師さんこういうんだそうです。

どうしたの、大変ね、でも大丈夫よって、この言葉がね、通院したお母さんに安心安堵感を与えると。

これね県立大の調査の結果ね、これ全国に流れたニュースなんです。

だから、先ほど菊地さんがおっしゃったような遊び場とかなんかも、相談するところっていうか、病院に行けばね、当然相談っていうかね、看護師さんのどうしたの、大丈夫よって、その言葉一つだけでね、非常に安心して帰っていきける。

ということがありましたんでね、その辺も融合して考えていく必要があるだろうというふうには思います。

<昆野座長>

ありがとうございました。

続いて、金野委員さん、お願いします。

<金野委員>

公募の金野です。

先ほどの現在行われている妊産婦支援サービスについてですね、まだまだ周知が足りないのかなあというところがございます。せっかくいい制度なので、広げていただいてですね。さらに利用促進をしていただければというふうに思いました。

さて、ちょっと私、今日の会議に向けて、近隣の自治体はどうなってるかな、というふうに思ったんですね。

一関市だとか、北上市とか、そういうお産できる医療機関を持ってる地域と比較してどうなのか。

ざっとネットで調べた程度ですからあれなんです、今日の資料にありますように出生数の推移を見ますと減少傾向、これは実は盛岡をはじめですね、一関でも北上でも花巻でも同じように、その減少傾向はどこも総じてそうなんです。

だから先ほど菊地さんからご説明あったように、分娩できるできないが、産む産まないの選択の部分と必ずしも一致はしていないんじゃないかなというふうには思いました。

ただ、北上市がまちひとしごとの総合戦略の中で分析してる中では、北上市はわりかし減少するラインが緩やかなカーブなんです。

それは逆に言うと、ちょうどその産みどきといいますか、産む対象者のね、人達が要は若い人達といいますか語弊ありますけど、出産をしようと思う人たちの、人口が一定程度集約している、集積していることがあるのかなというふうに思うんですね。

ですから、この医療センターの問題だけではなくて、まちづくりをどうやっていくかっていうふうなね、今日市長さんが参加していないのでちょっと残念なんです、そういうところともやっぱりこう関わってくるのかなと。

この奥州市が将来にわたって基礎自治体として継続していくためには、やっぱりそこが大きなね、キーワードといますか大きな施策だ、県を挙げて、そういうふうな人口減少問題、子供のね、少子化問題については、力を入れておりますので、国を挙げてでありますけれども、そういった点で、奥州市だけっていうわけではないってことはね、変な話ですが、安心できる部分でもあります。

で、今日私からお話したいのは、2つあります。

1つは、せっかくその新医療センターを作るわけですから、ここが出産と関われる、今以上にサポートだけではなくて、現にお産ができる施設になって欲しいなっていうのは素直な私の気持ちです。

それをどういう形で持っていくか。

先ほどご説明あったように、ハイリスク分娩などを含めたね、例えばNICU、子供の集中治療室まで設けるような形になってきますと、かなりの重装備でないと、フルスペックでっていうふうな形になりますけれども、せめて普通分娩、正常分娩だけでもね、取り上げることができないかなというふうに思っております、手法としては、一つはその院内助産所。

助産師さんを中心としたプロジェクトチームでもってですね。チームプレーでないとできませんので。

そういうふうなものを市として立ち上げたいと、協力してもらえませんかというふうなことで、少しエリアを広げてね、奥州市だけじゃなくて、近隣のそういう自治体も含めて、助産業務したいって思ってる助産師さんがね、潜在的にいらっやると思うんです。

現にそういうお産ができない病院が増えてますので、そういった助産師さん方にね、お力をお借りすることができないだろうか。

看護協会さんをはじめですね、そういう職能団体等にも、打診をしていただくとか、いろいろ調査研究をしていただきたいなという要望を一つですね。

もう一つは、この新医療センターの中に、公設民営で、開業医の産婦人科を全国からどなたか誘致できないだろうかということです。

建物は奥州市で建てます、大きな医療機械も奥州市でそろえます、ですから、ドクターの皆さん、ぜひ奥州市に来て開業してください。

もちろんレンタル料といいますかね、市が貸し出しをしますので、賃料は発生しますけれども、報酬は全部先生持ってっていいですよ、開業と同じでいいですよ。

こんな感じであれば、全国ね、北海道から沖縄まであるわけですから、その中に1人か2人ぐらいは志のある人があるんじゃないか。

いうふうな、すいません根拠のない話で、夢物語で大変申し訳ないんですが、でも、真面目な話やっぱりそれがね、現実的にはあるのかなというふうに思っていました。

それで、盛岡には実は開業医の産婦人科、出産できる場所でいっぱいっていうか、数の評価がありますけどあるんですよ。

で、私の知ってるある先生は、お父さんがご高齢になって、息子さんが、新しく郊外に建物を建てて、それで産婦人科医院を自分の病院として、お父さんの代から引き継いでですね、継続されてるんです。

おそらく初期投資って1億以上ね、建物だ設備だなんだってかかると思うんです。

だからそのことを考えればですね。

全国の中に意欲を持った、そういう今勤務医をやっていて将来例えば開業したい、いうふうなね。

もし産婦人科医の先生がいらっしゃるんであれば、そういう人をぜひね、誘致していただいて、家族で移住をしてきていただいて、それでいろいろな奥州市自体のそういうPRもしながら、定着をしていただければいいなというふうに思いまして、発言をいたしました。

以上です。

<昆野座長>

ありがとうございます。

続いて、お願いします。

<菊地委員>

公募の菊地と申します。よろしくお願いいたします。

自分の意見を述べる前に今、金野さんの話をすごく聞いてしまいました。

なるほどと思って。

聞いてしまったんですけども私も先ほど未来羅針盤課の菊地さんのお話を聞いていて、前にいろんなアンケートを取ってきたところで、実際の声でそんなにその分娩をする場所は大きな問題ではないというお話があって、すごく意外でした。

私はここがすごく引っかかってるお父さんお母さん方多いのかなって実際思っていたので、私自身も子供が3人って、みんな奥州市で育ててきたわけですけどもそうなんだと。

意外とそこではないんだってのはすごく意外ではあったんですけども、やはりそこも大きな問題になっている方も多いと思うんですね。

他の部分でいろいろな支援が必要だということで、いろいろな支援が広がっていることはすごく喜ばしいことではあるんですが。

今の金野さんのお話を聞いていてなるほどそういう手法もあるかもしれないと。

ぜひその分娩施設をここについていうことを諦めてしまわずに、あらゆる方法をとって考えていっていただきたいところだなと。

その意見を述べようと思ってたところに素晴らしい意見が2つ出たので、ぜひその意見を推していきたいなというふうに思います。

私、子育て支援センターとか行く機会が多いんですけども、支援センター回っているとすごくやっぱりなんか、子供たちの数が減っている、利用される子供たちの数が減っていったって、先生たちもイベントをしてもなかなか子供たち自身自体が少なくなってるっていうお話をされていました。

実際その子供を、子育て支援センターに来てるお母さんたちがどんなことを考えてるかなと思って、今回来るにあたってちょっと意見を聞いてみたんですけども。

私自身の意見もいろいろありますけども二、三分ということでしたので、そちらの方を紹介させていただきたいと思います。

今回の新医療センターの役割について望むことということで、やはり夜間診療や休日診療を手厚くして欲しいという意見がありました。

また、妊娠中から産後、子供の健診までをサポートしてくれる場所であって欲しい。一貫してサポートしてくれるような場所であって欲しいということですね。

それから子供が大きくなっても安心して通える病院であって欲しい。

下の子が通院中に上の子が遊べる場所とか、託児などがあるとなおよいということでした。

それからネット予約など、便利な機能があって欲しいとか、どんな医師がそこにいるのか、ネットにあると、例えば顔ですとか、どんな方だとかっていうプロフィールがあると安心して通えるという意見もありました。

また薬だけなのか診療だけなのかというのをスムーズにして欲しいとか、とにかく安心して産みたいってお母さんもいらっしゃると思います。

また、診療代を電子マネーなどで便利に払えるようにして欲しいなどという意見もありました。

このほかにこれ以外の意見もありますのでそれは後でまた述べさせていただきたいと思います。

以上です。

<昆野座長>

ありがとうございます。

続いて、お願いします。

<佐藤委員>

公募の佐藤清光と申します。

私はですね直接奥州市で子供も妻もお産をしてないので、あんまり出産については詳しくわかんないんですが娘が2人いるんですが、県外におりまして、里帰り中部病院を利用しました。

実際にですね送り迎えは何かいいんですが、一番やっぱり出産のときにですね、中部病院まで送るのがかなり大変です。

季節によってはですね、冬の猛吹雪の日に当たったりすると大変なことになってしまうというを経験したんですが、そんな中で私はこの新医療センターに、出産の機能ができるのかなあとちょっと期待をしたんですが、この資料を拝見してそれが難しいというのも確かにわかりましたが、先ほど、金野さんのお話を聞いてですね、やっぱり極力最後まで諦めないでですね、この医療センターにはそういう施設を、できれば作っていただければ、これから、出産する方々が安心して暮らせるのではないかなと思いました。

それから市の妊産婦支援サービスについてはですね私は直接これ全然わからなかったんですけども、妊産婦さんたちはこれ、実際わかっているのももちろん意外とこの利用率っていうのが割と少ないように感じるんですが、やっぱりわかっているも今は車社会なので利用しないなんていう人も随分いるんだと思いますが、まだまだ周知がされてない部分もあるのかなと思いましたが、これからその辺ももっと充実させて欲しいなというふうに思いました。

以上です。

<昆野座長>

ありがとうございました。

続いて伊藤委員さんお願いします。

<伊藤委員>

公募の伊藤公好です。

私の方からは、今日説明があったこの資料2につきましては、現状についてはやはり、この通りだろうなというふうに思っております。

この現状を踏まえて、いかに新医療センターとして、周産期医療、それから産後のケアをどういうふうに、取り組んでいくかというふうなところをしっかりと議論していくことが大事なのかなというふうに思っております。

産後ケアにつきましては、先ほど説明がありました通り、今水沢病院で宿泊型を県内で唯一やっていたらというところは、ぜひ新しいセンターにおいても、引き続きやっていく必要があるというふうに思っておりますし、全国におきましてもですね、なかなか自治体で、委託先が見つからないと、その中でも宿泊型の委託先が見つからないというのが66.7%を占めているという状況があるということから考えても、この今当市でやっておるこの宿泊型については自信を持って、アピールをしていくということも大事なのではないかというふうには思っております。

それからあと日帰り型もそうですし、訪問型の方が非常に今先ほどお話しいただいた通り、細かくやっていたらというふうなこともありますし、現状としてはやはり人的資源であります助産師さんの数がなかなか増えないという状況もあると思えます。

私もちょっとネットで調べたんですが、今全国の中で、産後デューラというふうな取組をしているところがありますこれは協会があるそうです一般社団法人ドゥーラ協会。

これは資格を取っている方が訪問しながら、この産後のお宅に訪問しながらですね、いろいろ寄り添って支えているというふうな状況もあるというふうにお伺いしましたので、そういったところの取り組みも、新たに視野に入れながらこの新医療センターで裾野を広げていくような活動ができないかということも検討していただければなというふうに思っております。今回、この懇話会の方に私が応募した一つの中に、物、つまりハード面だけを整備するだけでは、うまくいかないだろうというふうに思っております。

皆さんも多分いろんな形でお聞きになってるかと思いますが、ソーシャルキャピタル、社会関係資本、これをですね、大きく、今回のこの新医療センターを作るにあたって、広く大きく市民の皆さんに呼びかけをして、先ほど冒頭の方で話がありましたように、なかなかこの産後ケアを利用するにあたってのその家族の理解がまだ、もしかすると職場の皆さんも理解が、なんでっていうところがあると思えますけれども、そういったところの社会の中で、それをしっかりとそれはぜひやった方がいいんだというふうな情勢を作り上げていくという取り組みも、私は成功する一つの大きな視点になるんじゃないかというふうに思っております。

以上です。

<昆野座長>

ありがとうございました。

続いて、錦山さんお願いします。

<錦山委員>

錦山と申しますよろしくお願いします。

さっき虹出てたんですよ。

見ました？すごい、すてきな日だなんてちょっと思っちゃいました。

私、今回保護者枠ということで、実際に娘がおりますので、その時のお話をちょっとさせていただきたいなと思います。

私実際に4年前に出産したんですけどもこのタクシー券いただきました。使わなかったです1回も。

多分それはこの利用率にも表れているなと思っていて、やっぱり皆さん車社会とおっしゃっていましたが、車持っていていざタクシー使おうってあんまり、ならないですよなって、何かあった時はやっぱり、こっちに住んでる人でしたらやっぱり家族いるので、何とかなっちゃうんですよ。

だからこの助成券というのをもう少し何か違う形で、例えば今は、いろんなものを高騰化してますので、ガソリンが助成券なったらもっと利用率は上がるのかなと思いました。一つの提案です。

あと、私が出産した時の訪問、助産師さんの訪問のときに、訪問していただいたのをきっかけに娘のちょっと異常が見つかって、済生会さんを紹介していただいたんですけど、やっぱり助産師さんにごく感謝していたんですが、その1回きりしかなかったんですね。

会いに行っただんですけども会えなくて、誰かもちょっと忘れてしまったというような感じだったんですけど、もっとやっぱり子育てって、幾らデジタル化になってもやっぱりフェイストゥフェイスで、顔を合わせて子育てしているの、そういうもっとこうLINEとかデジタルも大事ですけど、もっと密になればいいかなと、1人で子育てしてるんじゃないんだっていうのを、お母さんもお父さんもできればそれがわかればもっと町全体が明るくなるかなと。思います。

以上です。

<昆野座長>

ありがとうございました。

続いて、千葉さんお願いいたします。

<千葉委員>

千葉です。

新病院、医療センターとちょっと的が外れてるかもしれませんが、50億かかるわけですから、病院っていうのは私はまちづくりとか地域づくりと一緒に考えないといけないと思うんですよ。

まずここが優先順位、なぜかってさっき言った通り移動手段なんですよ。

今80歳以上が10人に1人。高齢化ですよ。

という1人の若者が1人の高齢者を支えるという時代になってきてますから、もう高齢化社会ですね。

もう少子高齢化が顕著になってますから、その交通網の整備をですね、優先的に利便性安全確保、ここを頭に置いてですね。

ネットワーク型こんなんで言うすかねコンパクトシティみたいな形を急速にね、進めていかないともう高齢化がどんどん進んでますから。

私自身も、もう今年70の前期高齢者になりますので、それを一つ考えていただきたいってことなんですよ。

あとタクシー助成券のことですけど、これもコロナワクチンも助成のタクシー券出ましたけど、私も1回も利用したことありません。

7回接種しましたが1度もやったことないです、結局自家用車でもう全部賄う時代になってますからね。

ただ若い時はいいんですけど、どんどん足腰が弱くなって新医療センターに行くときに、交通の便をですね、さっき言ったようにぴしっとしてかないと、どんどん患者数が減りますし、近場近場の開業医さんにどんどん行くような形になると思いますね。

まずこの交通網の整備ですね、私がお願いしたところは。

それからもう大分水沢駅周辺は閑散としてですね、人通りが少ないのが現状です。

もうメイプルもしかりで。

もう早めにこれもね、やっていかないと、もうどんどん、なんつうかドーナツ現象で、車車っていう時代ですけども、お年寄りの行き場がないんですよ。

ですからここをですねもう思い切ってね、EVの無人ドライブシステムっていうんですか、を導入してみるとか。

それからもうバスも盛岡だとでんでんむし号っていうんですか、今なんか見ると県交通も空気運んで行ってますよね、誰も乗ってないですよ。

ですから現状はかなり厳しい状態でありまして、そこを例えば100円でもいいですから、右回り左回りなんか
にこう考えて、少しバスも少し利用する方向もね、どんどん進めてもらいたいと思います。
あとそれからですね、あと開業医さんももうこれからは必要不可欠な連携を取っていかないと、大変な時代にな
ると思うんですね。
一つやっぱり症状が安定した患者さんは、かかりつけ医に逆に紹介するという形でどんどんどんどん推し進め
ていただきたいと思います。
それから今後の新病院の中一般病床145。
それから感染症病床の4床ということですけど、私はこれから高齢化ですので、もう少し緩和ケア病床ですね、
ここに力を入れないと思うんですよ。
そして医療療養の病床で診療とか処置が少なくて、主に生活のリハビリテーション、それから栄養指導など、家
庭復帰がですね、家庭復帰の長期入院が必要な、医療保険適用病床、この確保をぜひお願いしたい。
そうすることによってねやっぱり社会がねどんどん高齢化になってますから、そこをお願いしたい。
それがやっぱり感染症病床4床で少ないと思うんですよ。
何か新変異株でもう、エリスとかピロラとかもうわけわかんない部分がどんどん変異して強くなってきますから。
そういう病床も若干ね、これからは新医療センターとしては、増床していくという考えにしていきたいと思
います。
それからお薬もそうなんですけど、患者さんの負担減を考えてですね、行政の力も必要だと思うんですけど、今
ドローンありますでしょ。ドローンで遠隔地を配送するような方向もね、一つ考えていただきたいなと思ってま
した。
あとそれから先にこの奥州市モデルのところなんですけど、モバイルの導入促進ということで結局は車両に医
療器具を載せて看護師さんが訪問して医師が診療するということですね、これもどんどん拡充進めていただき
たいし、それから同時にですね遠隔アシスト手術っていうんですか、これも結局専門の医師がアドバイスしてい
ただいて、アシストって若い先生がですね、それにのっかって手術するというのであれば、どんどん研修勉強も
含めて都会と地方の格差がなくなってですね、医師解消にも繋がるような気がしますので、ここもどんどん、進
めていただきたいなと思います。新医療センターでここもね、やっぱりなんか、大事な部分のような気がします、
コンピューターがどんどん進めてますから、それをうまく利用してですね、電子カルテも当たり前ですから、その
辺を少し考えていただきたいと。
あと最後に、先ほど金野さんがおっしゃったように助産師をうまくですね掘り起こしていただいて、やっぱり少子
化っていうのはやっぱり産婦人科の存在意義が、すごく大事だと思います。
過疎にも繋がりますのでここに少し目を向けていただいて、うまく成功してもらえば、新医療センターも少し明る
い兆しが出るような気がします。
以上です。

<昆野座長>

ありがとうございます。
続いて松平さんお願いいたします。

<松平委員>

松平です。
周産期医療についてということに関しまして、実際に妊婦さんをお持ちのご家族から、今は支援サービスが
たくさんあって、とっても助かるのよと、いろんなことをやっていくのにとっても助かるんだ。
だけど、タクシーの助成に関しては、山間地にはタクシー来ないんだよね。
ということで、バスも来なければタクシーもこないようなところの人はどうすればいいの、やっぱり家族しかない。
というふうなことを嘆いておられました。
たくさん支援サービスはあるんですが、やっぱり基本になる出産費用も高いんだよねって、それもやっぱり少
子化に繋がることと思います。
その他に、やっぱり今は働き方改革で、高齢になっても、じじばばが働いてるので、子供たちを見てくれる人が
いない。
今後、その子供たちを育てるのに、どのくらい学校。今、大学に行くの各種学校に行くの、それが当たり前の時
代になってるので、その費用を考えると、たくさんの子供は産めない。
ましてじじばばと一緒にないから、そのお金も当てにできないっていうので、少子化に繋がっていくのでないか
なと思うんです。
それと、ハイリスク出産についてなんですけど、前にもどっかで言ったことがあると思うんですが、救急車に、やっ
ぱり出産のときに、救急車をお願いしてこうするとき、救急車に助産師さんが乗ってくださるようなシステ

ムがあれば、妊婦さんもう少し安心できるんじゃないかなと思うんです。
確かにハイリスクの出産を経験しました私も、西町の胆沢病院から東北大学病院まで救急車で行きました。
先生がついて行ってくださいましたその時は、でも今はその先生もいないし、助産師さんも、時間を考えないで、朝であれ、昼であれ、夜中であれ、やっぱり出産は時間っていうものが待てないものなので、そこら辺のところ、やっぱりその救急車に助産師さんの配置をお願いできたらいいんでないかな、ていうふうな思いでございました。それとやっぱりその、出産後の手当も、少しでも補助していただければいいんじゃないかなというふうに思います。
周産期医療に関して、以上でございます。

<昆野座長>

ありがとうございました。
続いて佐々木委員さんお願いします。

<佐々木委員>

今日ここに出席させていただきまして、皆さんのお話を聞いて。大変な時代だなと。
まずもって、ですからそう思いました。
まず奥州市が合併してしばらくはなるんですけども、人口的に見まして、岩手県では盛岡に次ぐ人口だと。というふうになっておりますが、第2の人口を抱える奥州市が、今の医療制度に則って今いろいろな施策をやっているわけですが、ここにある、県内分娩施設を維持しつつ、さらに奥州市新医療センターにも分娩機能を設けることは極めて困難な状況だと、これをみて私ちょっと驚いたんですが、その理由は様々あると思いますけれども、これだけ人口を抱えて合併して、新市になって、医療施設まで設けられないとなったのは、どういう結果でこうなったのかと。
ということをちょっと不安で、たまりません。
それでこれから若い人たちが、安心して、産機を迎えて出産できるような新しい施設ですから、そういうのに、ぜひ体制を整えてもらえばいいなというふうな思いでございます。
以上です。

<昆野座長>

ありがとうございました。
続いて菅原委員さん、お願いいたします。

<菅原委員>

奥州市食生活改善推進員の菅原です。
今日はですね、周産期医療についてなんですけども、結構周産期医療となるとやっぱり医師数、医師の確保が難しいというので、そこはなかなか分娩施設もってとは言えないんですけども、ただ、奥州金ヶ崎圏として、分娩施設がないっていうのはありえない話なので胆沢病院と提携して、提携なり何かして、ぜひ分娩施設を、設けてくださいと県に陳情はしてるんでしょうかね。
ずっとこの問題って長きに渡ってあるので、ちょっとそこが気になっておりました。
あとはやっぱり先ほど金野委員さんが言ったように、北上市は、分娩数が緩やかになっていくことなんですけど、やっぱり親の収入格差もあると思うんですね、収入がある程度なければさつき松平さんも言ったように、収入がなければ子供は持てない、そういう人たちがいっぱいいると思うので、是非とも勤め口を。
安定した働き口があるといいなと思っております。
以上です。

<昆野座長>

ありがとうございました。
それでは八幡さんお願いします。

<八幡委員>

先ほど大体お話をしたので、岩手奥州ダブルケアの会の八幡といいます。
ダブルケアの会なんだって思われそうなんですけども、育児をしながら、介護が必要な家族のケアもしているダブルのケアをしている、主に30代40代50代の女性をお母さんたちの交流会を開いている者です。
月に2、3回ぐらいのペースで開いています。
この懇話会では、お母さんたちから聞いた話なども、ここの懇話会でお伝えできたらいいなというふうに思っ

参加しています。
以上です。

<昆野座長>

ありがとうございました。
それでは千田委員さんお願いします。

<千田委員>

今のですね、急性期から亜急性期、療養型の病床について、大体30年ぐらい前に私たち論議したような感じがします。

それをまた今ごろやってるのかなってというのは、かなり進展してないなって感じはします。

あと産婦人科の問題ですけども、産科の先生たちっていうのはなぜ減ったのかっていうと、みんな子供さんに何かあって、出産のときに異常が出たなんかした場合に、必ずそれが裁判になるんですよ。

それを嫌って、医学生がまず少ないということと、それからそういう先生を、逆に言えば、各市町村で受け入れないということ、また民間の開業医さんたちもだから産科をやらないっていう、そういうような状況で、結局は八方塞がりのような状況だったんですけども。

仮に金野さんのおっしゃるような形でやる場合に、もし何かあった場合のリスクについて、それも医療機関の方で全面的に補助しますよと言えば、或いは来るかもしれない。

いずれ、産科の場合は3人欲しいです。1人では駄目です。

その辺のところも含めて考えていく必要があると思いますし、今現在奥州市でやってる、水沢病院の中心にしてやってる、泊りのやつですね、そういうことなんかも含めて、やっていく必要があるというふうに思います。

それから今後ですね、介護需要は高まるけども医療が少なくなるっていうこの考え方を私はそうなのかなっていうことをすごく疑問に思います。

なぜかっていうと高齢者は、この奥州市から減らないんですよ。働ける人達はどんどん減ってきます。

そういう中で、残るのは高齢者だけなんですよ。高齢者っていうのは、医療が必要な人たちなんですよ。

だからそんなにそんなに急に減ってくるのかなっていうことで、ちょっとそれ疑問に思いました。

以上、私の考えを述べました。

以上です。

<昆野座長>

ありがとうございました。

委員の皆様方に全員にご発言いただきながら多くのご意見をちょうだいしました。

私もお話を聞きながらですね、新医療センターには周産期として相談機能と支援制度の充実、それから、私はやはりこの地域の中で産める仕組みっていうのが欲しいなと思っておりましたので、院内助産っていう形ではよろしいかと思いますが、何かしら仕組みを工夫してこしらえていただきたいなと思ってたところでもございました。

皆様方の方から発言いただいた内容とほぼ一緒でもございましたので、ここで事務局の方からコメントがございましたらお受けしてみたいと思いますが。

<菊地未来羅針盤課副主幹>

すいませんちょっと一つだけ。私最初の方にいろんな方とあって、分娩のことがですね、よりも意外とそういうそんなについて話がありましたけれども、何かそこら辺の背景をちょっと、何か今思い出すとですね、菊地さんがおっしゃったように、安心してみたいっていうのがやっぱり皆さんなんか共通してたような気がします。

これはやっぱり晩婚化であったり、ちょっとなかなか1人、子供の数自体も昔は3人4人、ところが今は1人というのが結構大きくなってきてですね、その1人を産むのにあたって、まずは安心して産みたい。

もうとにかくそれがまず一番に来てるということがあって、例えば近くなくてもですね、やっぱり安心して、設備が整ってるところで産みたいっていうのが多分背景にあったんじゃないのかなというふうに思いました。

あともう一つはですね、例えばそういう方に、お父さんとかお母さんいないんですかっていうふうに、市内にいないんですかって聞くと、いますっていうんですね。

そういう方たちからいろんな相談とか受けられないんですかとかかっていうと、働いてますとかかっていう、要はそういう昔だったなら、お父さんとかお母さんに頼れたところですね今頼れなくなっているのかなと。

私山梨の方に1回産後ケアの施設にちょっと研修行ったんですけども、そこにいる人、人たちの声を聞いたらですね、自分のお父さんやお母さんに相談もできないのでこういうとこに預けてるっていう人がすごく多かったです。

ただやっぱりちょっと時代が変わってきてるんだらうなっていうのはすごく感じてましたので、先ほどのようなこと

にも繋がっていくのかなというふうには思いました。

あと金野さんの方から北上市がかなり伸びてるっていうかですね、あそこは実は社会増減で唯一プラスのところなんですね、社会増減っていうのは転入転出の差なんですけれども。

人口減少は、自然増減と社会増減の、合計ですけれども、社会増減で唯一プラスになっているのが北上市です。今奥州市もですね、今年まだ微妙にマイナスですけれども、2、3年後には多分プラスになります。

それぐらいやっぱり企業誘致とかですね、この県南っていうのは非常に有望な地だというふうに思っております、いずれ若い人が来れば出生数も増えていくと思いますので、そういうことからまたこの県内の周産期圏の考え方もまた変わっていくんじゃないのかなというふうに思っております。

県の方には常に要望はしております。

ただ県の方は今のところ県南の方は中部圏、あと県南の磐井っていうかですねその二つの中で周産期を賄おうっていうことになっておりますですね、どうしてもちょっと胆沢病院がそのどっちかって外れてしまってるんですけれども。

そういう中で、これからの人口動態に応じてですねやっぱり変わっていくだろうと思いますので、引き続きそこから辺りですね、要望して参りたいと思っております。

ありがとうございました。

<桂田室長>

私の方がちょっと意見いただいたのでちょっとお答えしたいんですけど、その前にちょっと錦山さんが今日ちょっと3時までということで、この後何かお子さんのちょっといろいろあるということでしたので、ここでちょっと退席するかと思いますので、よろしく願います。

それで、先にですねご質問を何点かいただいたのでそれをちょっとお先にお話したいと思えます。

前は分娩施設あったのに何でなくなったんだろうっていうことの話がありました。

それが奥州市が何でなくなったんだろうっていうようなお話でした。

先ほど他の委員さんからもお話あった通り、そもそも産科の先生の数が減ってきてるという背景があります。

なかなかチームを組まなきゃ駄目だということとなればですね、結構そこにある程度集約して、お医者さん集めなきゃ駄目だといったときに、やっぱり市町村レベルでなかなかよそから集めてくるってのは、実際難しく、県の方で中心になって今取り組んでいるところです、周産期に関しては。

盛岡から花巻、北上、奥州市あって一関っていう北上川沿線沿いを考えると、奥州市確かに人口だけで見れば第2ではあるんですけども、そんなに変わらない市町村が並んでる中で、物理的に考えますと、ちょうど北上の辺りで一関っていうふうに、まあ飛ばされてしまったっていうことで、少しちょっと抜けてしまったのかなというふうな思いしております。

これに対して、容認してるかといいますか、県にしっかり要望してるんですかっていうところは、これはもう前からですね、何とかここ充実させて欲しいということで、ここはしっかりと毎年ですね、しつこく県には要望してはいるところです。ただ、やっぱりない袖は振れないといいますか、なかなか難しいという回答という状況でございました。

そういったことで、意見いろいろお聞きしまして様々な意見あったんですけども多かった意見は、やっぱりここ、そうは言っても諦めるべきじゃないですよ、何らかの形で新医療センターをきっかけにですね何とかできるんじゃないですかっていうのが多分皆さんの想いなんだろうなというふうに思いました。

助産院とか先生お1人でもいいから、まずせめてお1人でもいいから連れてきてっていうようなお話もあります。もしそういったことであれば、極端な話、新医療センターが仮にできない、いや、これ作りませんとしたとしても、なんというか、そういう確保を1人でもってっていうところの整備ってのやっぱりこそが必要なんだろうなと。

別に新医療センターができるから欲しいわけじゃなくて、新医療センターがなかったとしても欲しい機能なんだろうなと思いますと、やっぱりその、いろんな場面を通じてそのお医者さんを連れてくる努力ってのはするべきだと思っておりました。

その連れてくる先が、例えば先生が新しく開院したいっていうんであれば、そこに支援するっていう、補助を出すという手もありますし、中には新医療センターができるのであればその中にぜひやらせてくれるっていうもしそういう先生がいるのであれば、当然そこは新医療センターの対応を考えていきたいと思えますし、なので、新医療センターっていうことにだけにとらわれず、ちょっと広い視点でですね何とか産科の先生を何とか連れてこられるように、或いはその連れてくるきっかけになるような取り組みができるようにですね、そこを今からでもできることだと思いますので、そこはしっかり考えていきたいと思えます。

ただ、皆さんの想いは、その新診療センターの基本構想の中に頑張りますって一言だけになるかもしれないんですけども、何かは、やっぱりその想いとして、そういう想いがあるんだということだけは、何らかの形でやっぱり反映は必要なんだろうなと今ちょっと思ってるところでございます。

<菊地未来羅針盤課副主幹>

ちょっと今の件で補足いたしますけれども、この新診療センターを造るにあたってですね、自治医科大学の今野先生っていう方にメディカルアドバイザーになってもらってるんですけど、その方は、自治医科大学の産科医です。

その先生にいろいろお話を聞いて、やっぱりなかなか難しいという話はされてます。

ただ、先生いわくはですね、まさにチームが必要だっていうはその通りなんですけれども、まず何よりも助産師を育てなさいと、助産師、今、はっきり言えば有能な助産師がいれば、へたな産科医よりも全然いいと、そういう話がありました。

助産師は、産後ケアとかですねそういったところで、当然たくさん集めなければなりませんし、多分集約されていくと思います。

加えて、今水沢病院の方には、例えば小児科さんがいらっしゃいます。先日麻酔科の方が確か入りました。

そういう脇を固めていきつつ、となれば、例えば最初は婦人科の先生でもいいのかもしれませんが。

例えば婦人科を開設するとかですね、1人、2人ってなっていくうちに自然とそのチームができ上がっていくかもしれないですねっていうようなことは、ちょっと話が出てましたので、我々としても別に諦めてるつもりもありません。

ただ、いきなり作るの難しいんですけどもそういう体制、そういうのに必要なスタッフっていうのをしっかり固めつつ、いつでもそういう先生が来た時にですね、分娩できるような体制だけは、決して諦めずにしっかりと整えていきたいと、そういうことが早道なのかなというふうに考えておりますので、まずはそういうところを脇をしっかり固めてですね、体制を整えていきたいと思っております。

以上です。

<昆野座長>

事務局の方からコメントがありました。

あとまだ周産期医療についてということでご発言をしたいっていう方がいらっしゃればお受けしたいと思っておりますけど。

どうぞ。

<金野委員>

何度もお話してすいません、公募の金野です。

今のお話を聞いて、ちょっと「ん」って私は思いました。

そもそも、産婦人科医をね、募集してますよ、お産をやる先生を、全国にね。

来てくださいませんかというアプローチをするのかしないのかということですよ基本的には。

だから私は市長さんにこの席にきちんとついていただいて、市長としてはどう考えるか、という政治姿勢といいますかね。

それがその事務局でももちろん固めていくのは大事ですよ、いろんな条件も必要だと思います。

同時にちょっと私さっき言いそびれたのは、実は今までお産をやっていた開業医の先生方は、サポートはできるよ、メインになる先生が来てくれればお手伝いするよって言ってくれてるんですよ。実は。

だから、その中心になる先生を募集してるんですけどっていう狼煙を上げることが必要じゃないんでしょうか。

黙ってでは来ません。

ですから、打って出る、積極的にね、打って出るべきだというふう思うんです。

ただ、フルスペックは難しいでしょうから、それは開業医さん。

例えば誘致します新医療センターと分けてもいいですよ、分けてもいいですけど、いずれ市として全面的にバックアップしますよ、いろんな経費援助含めてね、それから助産師の体制ももちろん今おっしゃってるのはその通りなので、助産師さんのそういう体制もこちらとして努力しますよ、目標がなければ実現できません。

もうその目標を持つのか持たないのかっていうのを、しっかりもう1回議論していただきたいんですけど。

以上です。

<昆野座長>

ありがとうございました。

事務局の方からコメントをちょうだいしたいと思います。

<高野健康こども部長>

ありがとうございます。

今お話ありました通り、産科医を誘致するということについては、ずっと県要望とかでも続けてやってきた経緯

がありますので、決して諦めてるわけでも何でもありません。

ただ今、先ほど桂田参事の方からお話がありました通り、金野委員さんの提案の中で、そういった個人のお医者さんを誘致するという方法があるんじゃないかという話については、その新医療センターと必ずしも関連じゃなくてそれできることだということは、今私達の方でも理解をしたところでございます。

他市町村でも確かに土地代だとか建物に対しての、或いは機材に対しての補助を出しながら、ぜひ来てくださーいというような助成制度っていうのも、実際設けてるところありますので、そういったものをいずれ参考にしながら、そちらもですね、合わせて進めることも検討してみたいと思っております。

以上です。

<昆野座長>

ありがとうございました。

そろそろ時間の方も大分経過してきておまして、協議の方、意見交換、フリートークの分も残しておるので、もしあればフリートークの方ですね、引き続きお願いする形にしたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

それでは次、(2)その他新医療センターについて、ということでフリートークの形式で進めさせていただきたいと思っておりますが、まず初めに事務局の方でお願いしたいと思います。

<桂田室長>

フリートークの部、特に資料ございません。新診療センターや地域医療に関することであればご質問やご意見でも自由にご発言いただきたいと思いますと思ってました。

ただし、なるべく多くご発言いただきたいと思いますということで、なるべく発言は簡潔にお願いしたいなと思ってます。

あと次回の意見交換テーマもお示しておりました。

あとその際にもですねご意見をちょうだいできますのでその点もお含み置きいただいて、少しちょっと時間のことを意識しながらですね、ご発言いただければよろしいかなと思います。

どうぞよろしく願いいたします。

<昆野座長>

ただいま事務局の方からも説明がありました。

次回には、新医療センターに係る医療機能と病床規模、それから設置場所という部分について、皆様方と意見交換させていただく場面もございますし、あと整備の基本計画の策定に係る関係でも、のちのちには確認をすることができるという状況の中で、今回、新医療センターについて、何かをお考えいただいている部分があれば、フリートークでございますのでご発言をお願い申し上げたいと思っております。

発言なさる方については、挙手をいただきながらよろしく願います。

千田委員どうぞ。

<千田委員>

胆沢病院、医療局、県の医療局ですか、医療局と今度の新医療センターとの、医療に関わるすみ分けはなさっているのでしょうか。

例えば急性期医療は胆沢病院、それから後の急性期を過ぎた患者さんについては水沢病院というのは、形のものを探るなってるのかどうか、それからあと同じ医師そのものについてもですね、水沢病院の先生方はその辺のところは十分にご理解なさってるのかどうか。

水沢病院も急性期を目指してるんだよっていうのは、もう済まない時代だと思うんですよ。

その辺のところはどうなのか、その辺ちょっとお聞きしたいと思います。

<昆野座長>

それでは事務局の方で現状のことについてご確認をお願いします。

<佐々木医療局経営管理部長>

医療局、経営管理部の佐々木でございます。

今お話あった点についてですが、県医療局とのすみ分けはどうなってるという部分でございますが、直接一対一というよりは、或いは奥州医師会、県立病院両病院含んだ医療懇話会というのがあるんですが、その場で、今回のこの新医療センターの機能等々については、やはり緊急的な救急医療については県立病院、特にも胆沢病院に集約するという大きな流れについては、それぞれ私も確認しておりますし、県立病院の方も理解されていると、いうふうに思っています。

その辺の役割分担を今後ちゃんと進めていくというのが、一つ国の方針でもございますので、その辺は十分話し合いができているものというふうに、十分とはあれですけど、話し合いができていうふうに思っております。

それから、現在の水沢病院の医師がその辺どう考えてるのかっていうことにつきましても、やはり昔とは違って、救急一本ということではなくて、やはり全体的に、軽い急性期から、或いは回復期、もし手を広げて訪問診療、或いは在宅医療について、そこを担うべき。

県立病院を退院した方が水沢病院に来ていただくというような流れは、医師の方でも確認とれているという状況でございます。

<昆野座長>

県の方と医師会の方と懇話会の中で確認をさせていただいてたっていうお話のようですが、どうですか。よろしいですか。

その他、皆さんの方でございますでしょうか。

はい、金野委員さんどうぞ。

<金野委員>

公募の金野です。

まずこの間の新聞報道等で、水沢病院にね、新しいお医者さんが着任されたというふうなことで、非常によかったなというふうに思っております、ありがたいなというふうに思うんですね。

この新医療センターをオープンまでにどのくらいお医者さんを集めることができるかなってのは、一つの大きな目標といいますかね、貴重な柱だというふうに思うんですね。

ですからその辺の意気込みといいますかね、こうしたいんです、こういうふうに基礎診療科、基本的なね、診療科がラインナップして充実していきますよっていうふうな思いなのかどうなのかちょっとその決意をお伺いしたいんです。

<昆野座長>

ありがとうございました。

そのあたりをご発言お願いします。

<佐々木医療局経営管理部長>

医療局ですけれども。

ありがたいことに報道していただきました通り、10月1日より2人の若い医師が着任してございます。

この2人については、県の奨学生或いは国保連奨学生の義務履行という制度がありまして、その中小病院に何年か行く制度でございますので、その中小病院のいわゆる勤務先ということで水沢病院を選んでいただいたと、本当にありがたい話だなと思っております。

もちろん市の奨学生もいらっしゃいますので、そちらの方々、今奨学生で常勤になってる方が1名いますので、ぜひその辺も増やしていきながらですね、若いドクターをぜひ活気をつけてやっていきたいなと思っております。

診療科については、やはり総合的に診察できる総合医とか、或いは内科の先生を中心に、本来であれば、雇用といいますか、来ていただきたいという部分は考えてございます。

確かに医師確保というのが、病院運営にかなりのウエイトを占めておりますので、安心してこうですと言えるような状況ではまだないんですが、具体的にある大学と協議が進んでおりまして、しかる時期が来ればですね、定型的にといいますか、来ていただくことも可能性としては高くなってきているという今段階でございますが、残念ながらまだ発表できる段階ではございませんので、着実にその辺も進めていきたいと考えてございます。

<昆野座長>

ということでございますよろしゅうございますでしょうか。

その他、皆さんの方でございますでしょうか。

菊地さん、どうぞ。

<菊地委員>

公募の菊地です。

第2回目の方の内容にも関わってきますので、あまり長くはお話したくないんですけども設置場所について

いうところで、すぐ近くに住んでいる中上野の住人の友達からちょっと話を聞いていたんですけども、彼女だけではなく私の周りの人たち、そして子育て支援の、出かけていったときのお母さんたちの話なんですけども、今回のこの水病が移転するにあたって1月にニュースをテレビで見たけれどもその後どんなふうに進んでるか、実は実際よくわからない、ての声をたくさんいただきます。

で、今回のこの会議の目的っていうのが市民目線での利用者目線での意見がたくさん欲しいっていうことでしたので、今回この公募委員に応募させていただいたのも、やっぱりたくさんの方の声を吸い上げていただきたいなと思ったので、今回も今日も仕事を休んでここに来てるわけなんですけれども。

応募にあたってのところを見ると、市議会全員協議会、今日は市議会の議員さんたちもたくさんいらっやると思うんですけども、3回開き、地域の医療懇話会を4回開き、そして市政懇談会も6回開いて、出張懇談会も20回しましたとあるんですけども、そこに全然引かからない人たちがたくさん残念ながらいらっしゃるわけです。

仕事の状況だったり、夜開催されていてそこに行くことができなかったり、また、その情報をゲットすることができなくてそこに繋がることのできない方たちがたくさんいらっやいますので、ぜひ多くの方の意見をこれから吸い上げられるような仕組みを作っていただきたいなっていうふうには思っています。

例えば子育て支援センターを利用されてるお母さんたち、今までもたくさん去年も意見を吸い上げてきたっていうことではあるんですけども、例えばそういうところにこちらの方で出かけて行って座談会を、子育て支援センターでいろんなイベントをしまするので、その中の一つとしていろいろな支援センターを利用されてる方に、座談会開きますのでどうぞご忌憚ない意見をくださいみたいな形でご意見いただくとか、あとその中上野に住んでる友達に関しては、地域住民の説明会みたいなのは、いつ開かれるんだろうと。

実際その場所が決まらないことにはまだ開けないという状態であると思うんですけども、本当にあの場所が話が進んでるのかさえ私達にはわからない、っていうふうに言っていました。

このあたりどんなふうこれから進んでいくのかも、本当に近くに住んでいる者にとっては、例えばですけど花見のときに、自分家の敷地が駐車場代わりに利用されてしまっていると、これから病院ができればますますそういうことが起きたり、例えば渋滞が起こって、これからその場所で暮らしていくのにあたって、ちょっと不安があるというような声もいただいています。

そういう方たちたくさんいますので、できる限り早い時期に、そういうような機会も持っていただきたいなと思って。これ、第2回目にも関わってくると思うんですけども先んじてお話ししておきたいと思ったことでした。

以上です。

<昆野座長>

ありがとうございました。

市民に対する周知っていう考え方はどうでしょうっていうことですね。

事務局の方でコメントお願いします。

<桂田室長>

ありがとうございます。

確かにその地域のご近所の方々が少し不安に思ってる、っていうな情報もありまして、実は今月19日の木曜日なんですけども南地区センターの方にちょっとお邪魔しまして、出前、出張説明会、懇談会というような形で、町内会長さんたちの集まりが今度あるそうでした、そこでちょっといろいろな意見交換していきたいというふうに思っておりました。

で、やっぱり不安の声が大きいよということであれば、特にも町内会長さんたちとご相談なんですけど、近隣の人、ちょっとピンポイントにしてちょっとご案内してですね、町内会さんと連携した形で何か説明会といいますか、そういったところを考えなきゃ駄目かなというふうにはまずは一つ思っていました。

あと、それとは別にもっと広い視点で、11月の7日の火曜日(編注:8日の水曜日に変更)の夜6時半からと、あと夜来れない方もいらっやると思いますので、土曜日の午前中、10時から11時半までの2回ですね、市民の意見を聴く会っていうことで、これを企画してまして、あとチラシとか、簡単なチラシですけどねそういうのを使ってあとは市のホームページはもちろんですし、あと市の広報誌の方にも載せて周知しながら、そういうなるべく来ていただけるように工夫して、なるべく今回の10月中旬に2回やりますのでその意見を踏まえつつ、ある程度ちょっとこちらでも方向性を少し持って、改めてまた市民の方に少しこう、今現在はこういう考えでいます、どうでしょうかという形ですね、まだ素案の発表まではその段階ではないです。

その前にも、何かそういう広く説明を、ご意見を聴ける場を設けたいということで今企画しておりました。

お話のあったですね子育て支援センターっていうお話も、なるほどなと思って聞きましたので、そこは今後の検討にさせていただきたいというふうに思います。

ありがとうございます。

< 昆野座長 >

菊地委員さんよろしいでしょうか。

その他、ございますでしょうか。

それではないようですので、以上で意見交換の時間については終えたいと思います。
なかなか拙い進行で非常に申し訳なかったんですが、私の進行については以上で終わらせていただきたいと思います。
皆様のご協力に感謝申し上げたいと思います。
それでは事務局の方にお返ししたいと思います。

< 桂田室長 >

この場所議事進行ありがとうございました。

続きまして、次第の6その他でございます。

事務局から次回の会議予定についてお知らせします。

配ればいいのかとすみませんちょっとメモをとっていただければと思います。

次回会議につきましては10月30日。

10月30日の月曜日、時間がですね午後1時半。

今日と同じですね、今日と同じ午後1時半(編注:午後2時15分に変更)の開始させていただきたいと思います。
会場等の都合でちょっとぜひこの日にというふうに考えておりますが、都合の悪い方が多数あればですねちょっと再考したいと思いますので、都合が悪いという方ちょっとこの会議の終わった後に事務局まで、私の方までちょっと教えていただければなというふうに思います。

いずれ日程が固まり、決まりましたら正式には後で文書でご案内させていただきます。

事務局からの連絡は以上でございます。

委員の皆様からは何かございませんでしょうか。

よろしいですか。

長時間ありがとうございました。

それではこれもちまして、第1回奥州市医療センター検討懇話会を閉会いたします。

皆様お疲れ様でございました。